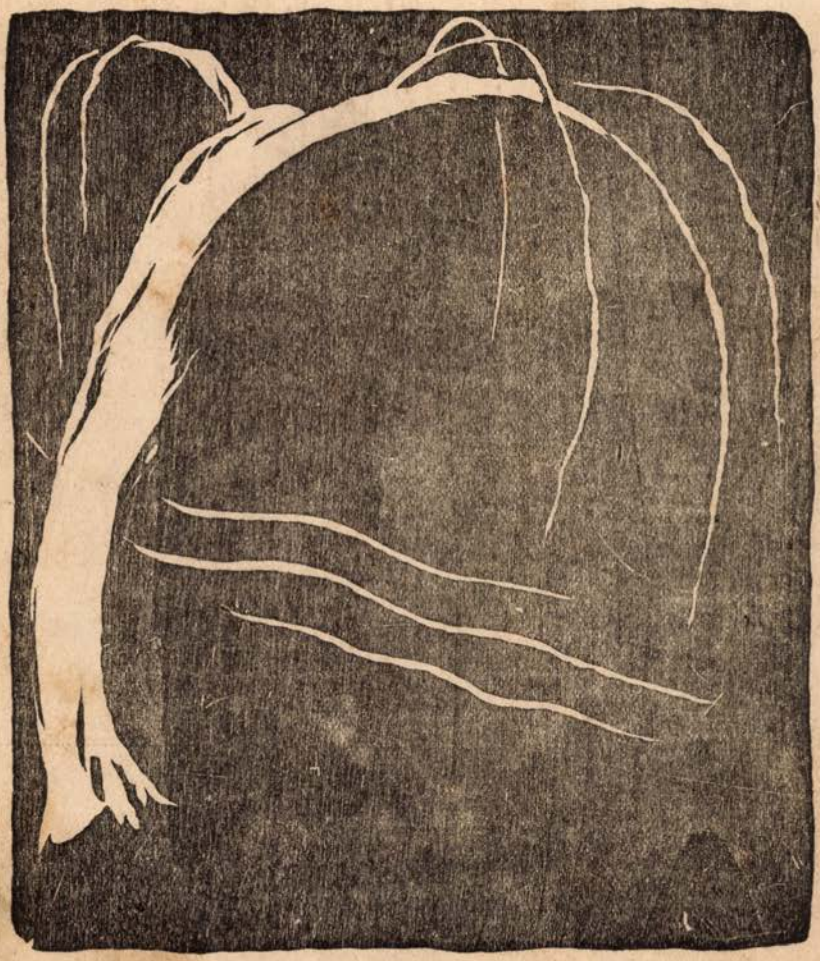
大正十三年二月十二日印刷　大正十三年二月十五日發行　毎月一回十五日發行

川柳雜誌

創刊號



川柳雜誌創刊號（大正十三年二月十五日發行）目次

誤れる川柳觀を排す……麻生路郎……（一）
近作……麻生路郎……（六）
句の境地……吉川啞人……（七）
近作柳樽……路郎選……（八）
箒と旗の句……元以交吟社例會吟……（一一）
末弘博士の「暴政は人を皮肉ならしむ」を讀む……麻生路郎……（一三）
募集句
仲人……井上劍花坊選……（一六）
花・輪……岸本水府選……（一七）
出世……吉川啞人竹田蘆穗共選……（一八）
▲元神戸柳影草社詠草……（一六）▲蔵倉屋小集……（一七）▲路郎居偶會……（一八）
傘のいろ〳〵……路郎生……（二一）
▲編輯室から……同……（二二）
川柳塔……人……（二三）
▲樂屋落……（二三）▲消息……（二三）

川柳雜誌

創刊號

現代人の思想にぴつたりと觸れた詩と云へば川柳の外にはない。我等は此の川柳によつて人生を的確に批評して行きたいと思つてゐる。

誤れる川柳觀を排す

▲現代人は刺戟に生きる

▲白紙になつて研究せよ

現代の讀物は私達にいろんな刺戟を與へて呉れます。これを逆に申しますと私達の現代生活は讀物からいろんな刺戟をうけることを欲してゐるやうであります。私達が漱石などの小說をよろこんで讀むのも矢張りこの藝術的作品がもつてゐる刺戟を愛するのに過ぎないのだと思ひます。講談本でも、探偵小說でも、冒險小說でも、戀愛小說でも、其の他の新聞雜誌でも、何れも多少違つた意味で、私達に一種の刺戟を供給して呉れてゐます。それは瓦斯が必要な場合には瓦斯會社から、電燈が必要な場合に電燈會社から電力を供給して呉れると同であつて、一つは智識慾であり、他は物質的所有慾であるだけの相違であります。

しかしながら一方には、さうした讀物を落ちついた氣分で讀んでゐられない程、俗世間のことに忙かしい人達も居られます假令長篇小說の一册や二册は落ちついた氣持で讀んでゐられる境遇の方でも、自分でさうした作品を發表して見やうといふ方は至極稀であります。といふ譯は書いて見たいといふ材料が無いのではなく、それを專心に書くだけの纏まつた時間が與へられてゐない方が多いのでございます。中には時間はどうにかあるけれども、文才の惠まれてゐない方もありませう。假りに文才のある方が一篇の創作を書きあげましたところで發表の機

闕を持たないといふ理由のために徒らに机上の一隅に積みあげてゐるに過ぎない方もあるのであります。

その他種々様々な理由の下に、遂に自分の心の底には何物か潜んで居るものがありながら發表もせず、闇から闇へ葬つてしまはれます。お互にこれ程遺憾なことはなからうかと存じます

こころがこゝに、さうした色々な刺戟をうけることも出來れば、自分で創作も出來、至極簡單に二つの慾望を十分に充たすことの出來る一つの形式が有ることを諸君にお知らせしたいと思ひます。

そんな便利な形式が有るなら是非私にも知らせてくださいと直さま手をお出しになる方があるかも知れませんが、慌てゝ手をお出しにならなくても、ほつ〳〵教へてあげますから、暫らく御謹讀を願ひます。

それは外でもありません、川柳を讀んだり川柳を作つたりすればいゝのです。

なあんだ川柳かと諸君はいふでせう。川柳なら君にわざ〳〵教へてもらはなくとも知つて居る。

さあこゝだ下女鉢卷を腹へ締め

や、それから

居候三杯目にはそつと出し

の口だらう。あんなものでは、倒底我々の複雑な現代生活を表現することも出來なければ、たいした慰めにもならないではないか。

我々の社會苦はあまりに大きい。あんな小つぽけな詩型にどうして盛り切れるものかと一言のもとにしりぞけられます。

一應尤のやうではありますが、それは貴方が未だ、眞實の川柳といふものを御存じない證據であつて、あなたの知つてゐられるやうな川柳は眞實の川柳ではないのであります。それは人間に化けた狐のやうなものであつて如何に巧に化けたところで狐は矢張り狐であつて決して人間ではありません。眞實の人間の方から云へば甚だ迷惑な話であります。それと同じで、川柳でも狐のやうな川柳のために、ほんとうの川柳がごれだけ誤られてゐるかも知れません。

私のいふ川柳は、決してそんな安つぽいものではありませんさつきからも申しております樣に、現代人が讀物の中から求めてゐる色々樣々な刺戟を、てつとり早くうけ容れることの出來る川柳なのであります。おまけに現代人の心の底に潜んで居るものを吐き出すのに尤も好都合であるところの川柳をいふのであります。

なるほど、さつき私が知つてゐると云つた川柳は狐が人間に

化けたやうな川柳であつて眞實の川柳はそんなものではないといふ話だけは判りましたが、果して眞實の川柳といふものが、そんなに私達の慾望を滿足させて呉れるでせうか。私達には貴方のおつしやることは、なんだか我田引水のやうにしかうけとれませんとおつしやるかも知れませんが、誰でも始めはさう考へます。川柳なんか至極つまらないものだ、あれは閑人のひねくりまはす一寸のお遺樂だ位にしか考へないものであります。けれどもそれは全く食はず嫌ひのいふことです。

まあ、だまされたと思つて私達のすゝめる川柳を一度味はつて御覽なさい。私達の川柳は例へて云ひますれば、するめのやうなもので嚙めば嚙む程味が出てまゐります。一旦川柳の味を知るやうになりますと死ぬまで忘れることが出來なくなるのが私達の川柳の持つてゐる特色です。それほど私達の川柳にはチャーミングなところがあります。それに貴方のお考へになつてゐられるやうな奥の淺い、薄つぺらなものではないのであります。私達の主張する川柳の一句は一册の長編小說よりも優れてゐる場合があります。勿論くだらない小說と比較しての話しではありません。それにお芝居のやうなものであれば、何時の間にか貴方の眼から、貴方の頭腦から忘れられて行きますけれども、川柳の一句は記憶に便利なだけに、それから受けた刺戟はいつまでも忘れません。殊に貴方の思想を川柳の一句に纏めておかれたならば貴方の思想は永く後人の頭腦の中に生きて居ります。おそらく永久性を帶びるでせう。

私に言はせれば、川柳はその人一人の人格の發露であり、その人一人の歷史であります。率ては社會の縮圖であるとも云へます。川柳一句は個人の作であつても、その個人の作品の中に社會を見ることが出來るからです。

然らば君のいふ川柳とはどんなものであるか。例を示して呉れとおッしやるだらうと存じますから手近にある川柳雜誌の中から、私が佳句だと信ずるものを書拔いて御覽に入れますから御淸讀を煩はします。

子の病氣亭主の方が先に知り　五葉
辭職して何をか云はん植木鉢　同
出前持生きねばならぬ顏でなし　同
女房の死は八百屋でも惜しがられ　水府
手拭屋流すと見せて竿の先　同
ほうれんそうなどで母子の飯が濟み　同
蠟燭の焰のやうなものおもひ　松窓
牡蠣船の仲居行李と共に着き　同
電話口十五や六の沙汰で無し　同
歸さぬと物をかくすは初手の事　蚊象

襷がけの女房に悪い友と見に　同
障子閉め切つて世間と別にする　同
商用と答へて思ひある身なり　日車
松の内屏風をたゝむ風をうけ　同
いまゝでと違ひ淋しい酒ものみ　同
折れさうな處を踏んで手水鉢　佳汀
何事も氣輕に立つは母ばかり　同
大阪と頷くとこは難波橋　同
廢兵の煙草を喫ふの憎らしさ　南北
某は笑ひ申さず國家老　同
悪人が榮ゑたまゝで初日果て　同
魂が抜けてるやうに駱駝立ち　蘆穂
柿の皮まで干からびた枕元　同
鶏へ輪替不意打喰はすなり　同

以上の句は皆私の主張する立派な川柳です。私はこれ等の尊い一粒撰りの川柳によつて私達の生命を永久に傳へたいと思つて居るものであります。こゝにあげた作家の外に、こゝにあげた句の外にいゝ句が幾らあるか知れません。一々列擧する紙數と時間とを持つてゐないので遺憾ながら右の二十有餘句をあげて其の一端を示したのです。こゝにあげた作家のうちには、既にこれ等の句に滿足してゐられない方もあるでありませうが名句であることには間違ひないのですから勿論作句上の參考になることゝ信じます。

川柳にお馴染の淺い方には右の句の意味が、ハッキリお判りにならない方もあるだらうと存じますが、それをこゝで一々解剖してお話することが出來ませんのを甚だ遺憾に思ひますが、句の解釋等については更に別稿で說くことにいたします。こゝでは單に川柳といふものは決して世間で考へてゐるやうなつまらない、謎かけのやうなものでもなく、俗惡でお座敷にのぼせぬやうなものでもないといふこと丈を知つていただけばいゝのです。そして今迄に先入主となつてゐる曲解をさらりと西の海へすて、全く白紙となつて眞實の川柳を研究していただきたいのであります。私達が『川柳雜誌』を發刊することになりました主たる原因は世間の人達に眞實の川柳を知つていただきたいからであります。私達は私達の知つてゐるだけのものをぶちまけて諸君が川柳研究の水先案内をつとめたいと思つて居ります

從來の川柳雜誌は申合したやうに初心者に不親切でありました。それは自分達の研究に忙がしかつたのにもよりませうが、初心者を導いたり、世間から誤解されてゐる川柳を釋明するために用ひるだけの紙面を持たなかつたのにもよるのでせう。私達はさうした點を特に、この『川柳雜誌』で補つて行きたいと思つて居ります。

近作

麻生路郎

ひるひなか蠅とる用があるばかり

疑ふたまゝで一週間は過ぎ

暇な日は三味張替へる氣にもなり

平凡の幸福豚へ話しかけ

豚の子へ續く豚の子ばかりなり

時計にまでうつる神經衰弱症

きれる氣かこの頃髷に結はぬ也

踊子へ雲でも降りて來そうなり

青いソフト東京の夢巴里の夢

初戀の思ひ出になる夏密柑

句の境地

吉川啞人

朝歸りだんだん家が近くなり

古句でよく知られた句である。遊冶郎にも一片の良心があると見ね、父の顔妻の顔を思ひうかべては恐怖の念、胸に湧く。『朝歸り行く時程の智恵は出ず』『不景氣な顔で戻つて來れば』朝歸り頼みに思ふ母は癇』萬事休す『親爺へは古今無双の嘘をつき』で逃げを張る親爺も少しは開けてる。『一ど寢入させて昨夜の憂見をし』

好いここへ來たと代筆書かされる

啞人なんかは字が下手だから安心だ、がちこうまいといろんな事を頼まれる表札の文字、三味線の左馬なんかは辛棒も出來るが眞劍な惚氣もきかされる『一ト通り聞いて代筆筆をかみ』『言ふ通り書くとハガキは二枚要り』これだから困る。

待ぼけの晩に仲居のまぶを知り

一本二本と飲んでも醉ひもせず、女將の世辭もうるさく聞ける。『上草履バタバタバタは行き過ぎる』悲觀する、夜は更ける。フト隣室の物音に耳をすませば、宵の仲居の逢ふて居る。

國の母生れた文を抱き歩き

他鄕にある娘の出産の知らせに、母子共無事とあるので、狂せんばかりに喜んだ國の母生れた文を抱き歩きと誇張した所に味がある。

して〳〵樣子はと里歸りに尋ね

初めて里歸りした娘の達者な顔を見て稍安堵した母のつゞいて、して〳〵家族の人に憎まれはせぬかとせきこんできく。『里歸り夫最眞に最う話し』

假寢へ詫澤山の藝者來る

『流行妓來るなり下へ耳を貸し』如才なく來れば旦那は寢て御座る。貴方すねてるの？濟まないね、これでもやつと拔けて來たのよ……。

折りから嫌な座敷の野暮な客、待つ人ありと知りながら……餘所の座敷の爪彈についつまされる。

千日をあと戻りする懐手

五割安で買ふた、飴玉に活動へ這入る氣もなくブラ〳〵と散歩。『懐手奢つて臭れる友に逢ひ』やヤ君、久ん振りだね相不變一人か。『ほうばつて返事に困る懐手』ようやくにして、ウム何處かへ行かう。

（引用の句は古句及現代の句）

近作柳樽

路郎選

日の丸のやうに梅干飯へ染み　北海道　句樂
送り膳汁がこぼれたまんまつき　同　同
蒼空を仰げば顔も寫りそう　同　同
お茶代もやらず氣兼な手を鳴らし　同　同
忙しく高座で替へる三の糸　同　同
ビール瓶コップ慌てるやうに受け　同　同
子をみんな育てあげると壽命つき　同　同
飛び込んだ蛙蛙を驚かせ　同　同
水枕うるさくなると眼をつむり　同　同
帶だけを替へてそこまで送りませう　同　同
次の間へ亭主夕刊持つて立ち　同　同
ごの子かゞ役に立たうと育てる　同　同
貰ひ風呂コンミッションが聞いてゐる　大阪　夢路

見遣へたとは馬鹿にした好い着物　大阪　夢路
二階から見て魚屋は斷はられ　同　同
學校出明日調べて來ると云ふ　同　同
ほんとうは勢一杯の土產にて　同　同
お忘れですかと女に言はれたり　同　同
三ケ日着物を掛けるとこがなし　同　同
元日に來て呉れただけ禮に出る　同　同
書き直しせねばよかつたアミダクジ　同　同
應接間馬鹿〳〵しくもいい天氣　大阪　幽香
新世帶畳をおごかす風が吹き　同　同
考へて書くと手紙は横へそれ　同　同
寄せ書に次の藝者も筆を甜め　同　同
爪彈きは鼠の走るのを見付け　同　同

もう妾簞笥磨かぬ日が續き　大阪　幽香
算盤を置いて淋しい圍ひ者　同　同
見付からぬ針姑に拾はれる　同　烏取　稍露
飯時に來て有福な暮し向き　同　同
〻高が合つてうぢんの箸を割り　同　同
漬物を賞めてたべるも女客　同　同
紋付に下駄の鼻緒がしまりすぎ　同　同
末つ子の行儀をほかの子に示し　同　京都　陽醉
嫁の手にたぐり切れない凧の糸　同　同
春の夜の夢ばかりなる木賃宿　同　同
やゝあつて裏を返した新葉書　同　同
加茂川へ墜つこちさうな京の宿　同　同
出勤のあとへゆつくり髪を梳き　同　同
張見世にポテン〳〵と梅の春　大阪　松郎
貰はれて來るとは洋食濟んだとこ　同　同
泊り客錢湯でちとのぼせて來　同　同
十三荷追々ヒスの氣味が見へ　同　同
戯れに同じ心になつてやり　大阪　蝶二
双六へ這ふて來られて母を呼び　同　同
うつかりと赤がちらつく尼の裾　同　同
走る事ならん潮湯の長廊下　同　義矢滿
母親の歯擦ゆがる娘に紐が解け　同　同

叱られた二度の使ひに蠟がたち　大阪　義矢滿
先生の曲るのを待つハーモニカ　同　同
夜明けから生れ出たのか納豆賣　鳴尾　葭乃
春戸をくる音に夜明と知られたり　同　同
焚火から歸ればお茶がふくところ　同　同
串團子二つ目からは二度に喰ひ　神戸　峰月
砂利の上夢で走つて居る如し　同　同
友達を輕んじる程金が出來　同　同
お靜かにお歸り願ふ聲が枯れ　大阪　大頭
おごつたがいつち終ひの椅子を立ち　同　同
塗下駄に指の跡ある小料理屋　同　同
賽錢の音を神主聞き澄し　和歌山　久樂
養子してからは二階に娘寢ね　同　同
あんなにも酒がうまいのかと思ひ　同　同
つり皮へ自慢の襦袢ぶら下り　大阪　福榮
一寸した坂に車の値が上り　同　同
あの蛇を香具師はつかわず終ひなり　同　同
臥て待てご起きて待てども待ち切れず　金澤　柊花
獨りでにあふれた水の清いこと　同　同
伐る時の算盤をして杉を植え　鳥取　八天子
井戸端の此處にはおしい苦が付き　同　同
庖丁の光と君の眼を比べ　金澤　久流美

庖丁の玩具は凹むものなりき　金澤　久流美
脊の子を賞めて用事の口を切り　廣島　桃里
病人が元日だけの床を上げ　同　悟郎
三味線も賣らねばならん事が出來　大阪　同
もう燒けたらしい芋屋に湯氣が立ち　同　栖堂
大袈裟に雛妓は客にほれて見せ　鳴尾　同
二階ではお歸りになつて床を上げ　神戸　錦城
日が良いと見ね嫁入の荷が通り　同　同
辻便所問へば柳のあるところ　大阪　子行
里の母もう玄關で恐れ入り　同　同
角帶で行くと先生年が寄り　大阪　長人
そんな氣もしますと女房返事する　同　同
今日だけは生きるつもりの飯を喰ひ　東京　盜泉
ちと古い頭を持つた知事夫人　同　同
川開き化學の江戸と言つた氣味　稗島　眠聲
カレンダーもう一枚で春になり　同　同
軒をつくように綿屋はつんでゆき　大阪　順三
霜燒の手で燒豆腐すくはれる　同　同
その昔ランプ掃除をした話　鳴尾　芦村
なまこ賣銅貨の釣は濡れている　大阪　一醉
巡査止めて交際易い人となり　岐阜　暮期
失せ物に易者の首の曲りよう

髮ばかりふくらし雛妓小さい顏　朝鮮　泰平樂
枘ほめたばかり陳列通り越し　大阪　彌生
カツケツで三味を彈いてる玉造　大阪　葛葉
生きる爲め鼠は飾り餅を曳き　朝鮮　是々坊
金錢に淡泊女房苦勞がり　神戸　楠堂
散髮屋鈎りの要らぬは知つてゐる　大阪　伯洲
念入れてむいだ林檎は土の上　天下茶屋　柳骨
新年に丈け必要な店が出來　大阪　雪柳
洗ひ髮晝飯喰べずじまいなり　大阪　波郎
年の市と別な氣分の裏通り　廣島　一兵
半襟を一掛分の腹を立て　朝鮮　青竹
白足袋をはいて蹈まるゝ宮參り　大阪　薫石
一晩のお宿申した甲斐があり　神戸　琴月
妾宅へ丈けは備後を數詰める　神戸　凡痴
ゴム靴はゴム靴だけの跡がつき　石川　白柳

『近作柳樽』の欄で奮つた作家の中から本誌の共選組の選者を依囑したいと思つて居りますから出來るだけ多數の佳句を投じられたい。本欄は嚴選をしますからそのつもりで願ひたい。（路）

箒と旗の句

元川柳以交吟社例會吟

箒

麻生　路郎選

交番所近所の箒借つて掃き　芦穂
居候箒を元のとこへ掛け　松郎
道を敎へるのに箒持ちかへる　同
掃いても〳〵師走の埃なり　凡平
舊劇を眞似て箒を掛けに來る　輝翠
大掃除箒を其處へ呼んで居る　二柳子
ちと腹の立つ手で箒握つてる　彩峰
羽子板を持つて箒の用が知れ　古城山
大一座箒を借りる用が出來　幽香
煤掃の箒の先きをみんな逃げ　芦穂
上り框叩くと箒役が濟み　彩峯
安カフェーあんな所に箒見へ　かほる
『チト外で遊び』と箒持つた母　徹底郎
竹箒今朝は餘つ程霜が降り　同
箒目のついてる門に垣があり　光太樓
肱枕箒淋しい音を立て　幽香
嫁は先ず箒の置所から覺へ　芦穂
荷造りが濟んで箒の早いこと　溪花坊
箒木目へ腕車靜かに歸つて來　徹底郎
箒持つ袖がつかへる緋縮緬　浩仙

旗

本田溪花坊選

旗振りが危く子供抱き上げる　悟郎
旗持は知らぬ字のある旗を持ち　かほる
旗行列尖頭だけは大き過ぎ　二柳子
紙の旗へ師走の雨のむごい事　徹笑
居候日の丸の旗頼まれる　彩峯
今日國旗出す譯母に話すなり　波郎
憧れの都の旗が近うなり　浩仙
停電と知つて旗振り喫ひつける　光太樓
震災地門松もなく紙の旗　天海
旗竿の埃も拭いて大晦日　松郎
屋上の旗見て風の向きを知り　輝翠
相住居旗を出す日を少し揉め　幽香
旗出してもう一度寢る新世帶　同
日章旗ロンドンで見る懐しさ　徹底郎
敷島を消して待つてる聯隊旗　同
廣告の旗で兄弟喧嘩する　松郎
日曜と旗日が續き母を訪ひ　耕鹽
入營の顔へ嬉しい旗が摺れ　古城山
旗一ッ人里遠く翻へり　浩仙

（人）

日の丸が宵寢のかごに忘れられ　路郎

（地）

旗の影がただうらうらに延びてゐる　同

（天）

押し立てた旗へ長蛇のついて來る　輝翠

社告

祝發刊廣告締切後著の分は次號に掲げます。

創刊號は印刷屋を途中から變更したゝめに遲れたのですから不悪願ひます（路）

末弘博士の『暴政は人を皮肉ならしむ』を讀む

麻生路郎

元旦の大阪毎日に末弘巖太郎博士の新聞觀が載つてゐた。それは社會人としても川柳家としても一讀の價値は充分であつた既に讀まれた方もあらうが、未だ目を通さない人達のためにその梗概を紹介し併せて之れが短評を試みるのもあながち徒事ではあるまいと信ずる。

博士はまづ、從來、自分は新聞の生命は社説にあるのであらうと思つてゐた。それは子供のときからタイムス紙の社説はよく英國政界の輿論を動かすものであるとか、我國でも其昔新聞『日本』の社説は大いに政界に重きをなしたものだとか、やれ某々内閣は新聞論説の一致した攻撃に遇つて斃れたのだとか、新聞社説が天下に重きをなしてゐた所以を聞かされてゐたので今もなほさうだとばかり思つてゐたが、近頃一新聞記者と談じた時にそれは要するに素人觀であると聞かされたと說きおこし次で現實の政治にも多少の興味をもつてゐる私が毎朝新聞紙を手にした際、一番はじめに目を惹かれる記事はなんであらうか？それは社説でも、外國電報でも一般の社會記事でもなかつた。自分はいつの間にやら『今日の問題』『近事片々』の類に目を注いでゐたと最近博士が新聞の讀み方に說き及ぼし、その事を二三の友人に語つて見たところが彼等も亦同じ答をなしたから斯うした目で新聞を讀むといふことは私の特異性でないと云ふことを知つた。して見ると今日の多數の讀者は新聞社の社説なるものを話題とせずして、反つて前述の如き簡單な特殊記事に興味を惹かれてゐたものだと述べられてゐる。そして『今日の問題』や『近事片々』の如き記事はどんな内容をもつてゐるかといふのに、社會各般の出來事に向つて、側面から寸鐵人を刺すが如き短評を加ふるものであつて、その特色を一言に

して云へば『皮肉』にあると喝破して、一項を結んでゐられる私が本誌の讀者諸君に一讀を煩はしたいのはその第二項であるから少しく原文を拜借して見やう。

現代吾國の新聞紙の書き振りが――『近事片々』に限らす一般に――何んとなく『皮肉』であることは果して如何なる原因に基くのであらうか？

それを考へる前に、私は歴史上これ程『皮肉』なものが一般に書かれ一般に好まれた事例が他にあるであらろうか、を考へて見た。その時私の頭に閃めいたものは『川柳』である。『川柳』の中にかゝれた輕いユーモアーと辛辣なる皮肉と、あれこそは正に現代新聞紙の『皮肉』に匹敵すべきものである。

私も又昨年のことであるが、ある友人に、大朝の『ブリズム』や、大毎の『きのふけふ』の如きものを見てゐると、川柳家の書きさうな文字であり、その内容がエッセンスされたものは一つの川柳になるものが多いと云ふ事を話した事がある。そして大朝の『問題の問題』の如きでも『水銀燈』でも以前にあつた三面の『赤鉛筆』でも『天聲人語』でも大毎の『硯滴』でも合財嚢』でも何れも川柳味の横溢してゐないものはないと云ふたことがある、はしなくも私の意見と博士の意見と同じところへ落ち合つたのは大いに愉快とするところである。しかしながら私が斯う云つたからとて、すべてそれ等の記事が川柳になる譯でもなく、又それ等の記事を執筆した記者達が川柳家である譯でもないといふことを云つて置きたい。けれども斯ういふことは云へると思ふ。川柳は現代人の心持を尤も適切に表現し得られる尤も簡單な詩形であると。

明治大正の聖代に生まれた吾々にはもうあの『川柳』に現はれたる如き輕きユーモアと鋭き皮肉とを考へつくことが出來ない。

と博士は述べてゐられるが、これは川柳に對して相當理解のある博士の言葉とも思へない。博士自身が執筆してゐられる『暴政は人を皮肉ならしむ』の一文が既に、大なる『皮肉』であり、『川柳』であると私は思ふ。

而して博士は現代の新聞紙の内容が昔の『川柳』であり、そして其の『川柳』の『皮肉』は現代の吾々にはもう考へつくことが出來ないと斷定されてゐるところを思ふと、現代に昔の『川柳』以上の『川柳』があることを御存じないのであらうかといふ疑問が湧かざるを得ない。これに對してイヤ現代にも『川柳』といふものゝあることは知つてゐるが現代の『川柳』は昔の川柳の如く輕妙にして辛辣なユーモアに富んでゐないではないかと言はれるかも知れない。けれども若しさうした御意見が博士の頭腦の中にあるものとすれば、我々は博士にもう少し現

代の『川柳』を研究していただきたいものだと思ふ。私達の『川柳』は昔の『川柳』よりも、もつと突き進んだものであり、もつと人生味に透徹したもので輕妙なるユーモアに於ても決して古句に劣るものではない。辛辣さに於ても古人の考へ覺ばざる點までつき進んでゐると思ふ。たゞ德川時代に生れた川柳と明治大正に詠まれた川柳に於ては同じ道德・同じ社會制度の繩張の中に住んで居ないための相違はある。けれども我々の眼から見た『川柳』は決して古句に劣つては居ないと思ふ。

それは果して何故であらうか？

併し、私は此の問に答へる前に又こんなことを考へる。今の新聞紙の『皮肉』は果して如何なる原因から生れたのであらうか？若しも今後百年二百年の後好事家にして大正時代の新聞紙を繙くものありとせば、今日吾々が『川柳』の前に驚くと同樣『近事片々』の前にその皮肉さと辛辣さとを驚嘆するのではあるまいか？あの皮肉とこの皮肉と、形こそ大いに異なつて居れ實は互に相似たるもの甚だ多きは果して何故であらうか？此の疑問を前にして考へた時ふと私の頭に浮び出たものは H. G. Wells の『暴政は人を皮肉ならしむ』と言ふ言葉である。一體川柳とは何か？あれは如何なる時代に如何にして生れたのか？言ふまでもなくあれは一般庶民に向つて政治の批評は素より思ふことを思ふやうに公言することがすべて固く禁ぜられて居た專制德川時代の產物である。あれを產んだものは庶民である平民である。恐らくは彼等の中の頭腦最も優れ才幹最も秀でたる人々こそ實に川柳の生みの母であるに違ひない。眼醒めたる人々はすべて眼前に展開せられたる一切の事象に向つて忌彈なき自由の批評を加へて見たに違ひない。その批評と意見とを抑壓するに『死』の制裁を以てし、政治はすべて之を特殊階級の專制手裡に收め終るとき、目醒めたる庶民は何を以て自らを慰めるか？それは皮肉であり落首であり川柳である、何故なれば正しき意見の公表が『死』を以て禁ぜらるゝとき、當時の人の執り得た唯一の手段は暗殺でなければならぬ。川柳は即ち力を用ひざる平和の暗殺である。勇氣なき刺客慷慨の詩を誦して自らを慰むゝが如く、目醒めたる町人は川柳を作つて自らを慰めたのである。

こゝで二項は終つてゐる。そして三項では明治維新の際に『萬機公論に決すべきこと』と宣せられたために庶民も又自由に政治を談ずることが出來るやうになり各人の意見を新聞紙上で盛んに公表するに至つた。ところが近來特權階級の壓迫によつて『萬機公論に決すべし』といふ謙遜さが失はれてしまひ、自由に堂々と何物をか論ぜんとする時に刑罰もしくは發禁禁止の手段を採られるので、勢ひ賢明なる筆者は之を『皮肉』と『冷評』と『漫罵』の中に、慰藉を發見せんと努めるやうになつた

のである。然し夫れ等の『皮肉』や『冷評』や『漫罵』が世の中を利するや否やといふことに關係なく、ともかくも自ら慰められるまゝに、さうした安全な手段に出たのである。これが今日の新聞紙が皮肉になつた事實である。しかし斯くの如き傾向は決して喜ぶべき現象ではないことを說いて世人を警められたのであつた。

我逵は博士のこの警世の大文字に敬意を表するものではあるが、その川柳觀に對しては他少の批評を加へる無禮を許容されたい。

『川柳』が德川の專制時代に庶民の聲として生れたことは事實である。そして古句の多くが他の文藝的作品の如く個人的に署名されてゐなかつたのも事實である。これは落首なども全く等しいものであつたかも知れぬ。けれどもさうした境地から詠まれた川柳は時の流れと共に、一つの文藝として生命を把持して來たことも認めていたゞかねばならない。ある時は直接さうした思想を盛るための形式として利用されたであらうけれども、いつしかさうした不平、不滿、世を呪ふ聲を洩すべき形式であるといふ觀念から放たれて作句するやうになつたのである。『川柳』を一つの文藝として取扱つて來た私逵に取つては、無意識的に、それ等の『皮肉』『冷評』『漫罵』が句の內容をなすことはあるかも知れぬけれども、それが直接目的ではない。と云ふことを知つていたゞきたい。

博士はたゞ、社會制度の方面からのみ『川柳』が論評されたゝめに、川柳といふものは社會が惡化した時にのみ生れて來るやうに誤解され易いが、賢明なる博士自身もさうしたお考へではあるまいと思ふ。

文藝が社會の進化に對する一種の油であることは私が說明を俟たずとも明かなことでありますが、私逵川柳家は川柳のために無上の愉快を感じてゐるのである。特權階級の橫暴、勞資協調の惱み、さう云つた方面の埒外にあつて平然として安住してゐるものはけだし眞實の『川柳』に贊讃してゐるからである。

（一月十日）

老紳士と子供

他人が苦しんで居るのを見ては助けずに居られ無いといふ老紳士があつた。或日彼が往來を歩いて居ると一人の子供が一軒の家の扉の前に立つてしきりに呼鈴を鳴らさうとして居るが何うしても手が屆かぬので苦しんで居るのを目にした彼は早速其處へ行つて呼鈴を押してやつた。然うすると子供の曰く

『叔父さん、早く逃げませう又惡戲小僧めと云つて捉へられますよ。』

募集句

仲人

井上劍花坊選

白足袋で來た仲人の長話　芦穂
見合の座仲人何か用が出來　八天子
仲人が來て恥かしいほつれ髪　白柳子
仲人に可笑な事を敎へられ　彌生
仲人に博士を賴む大學出　楠堂
仲人は一番わるいくせを秘し　松雨
きつちりと座り仲人草疲れる　暮朗
仲人は店の庫まで數に入れ　一洲
處女とのみ仲人語尾をにごらせる　柳童子
男工と女工の仲は水いらず　二柳子
仲人の云ふ山林の廣い事　徹底郎
薩摩下駄任せとくから連れて來い　天海
花嫁を連れて仲人露拂ひ　青竹
仲人へ直々話す二度の緣　久樂
仲人と仲人とまた喧嘩する　順三
水入らず嫁はイトコで仲人叔母　小人

仲人の方が躓く段梯子　螺二
仲人は洒落で座蒲團折つて立ち　同
仲人に聞けば世間にあるならい　光太樓
仲人の素面話が不首尾なり　同

五　容

よく行けば仲人ほろい儲けなり　桃里
一も二も皆仲人へ持つて行き　眠聲
宿下り假親を立て人を立て　彩霞
仲人の子供其夜は預けられ　梢露
仲人は胸と背中を押し宥め　羲矢滿

人

仲人に聞けば嬉しい事ばかり　是々坊

地

仲人はごいつだと云ふ横戀慕　徹底郎

天

仲人の勞を兄たる第三者　柳童子

元神戸柳影草舍

櫻　高橋古城山選

今しばしここ滿開の須磨の浦　青波
葉櫻になつてお茶屋も店を閉め　洋々
散つて行く櫻に見入る未亡人　一閉子
尼寺の徑が亂れて櫻咲き　春峰
この心知るや櫻が袖に散る　美都志
夜櫻へもうこれ切りの金で來る　露太樓
糸櫻思案がつかぬ樣に咲き　春峰
(人)伴待ちの肩に櫻が散りかかり　彩霞
(地)櫻咲く頃迄延はす里歸り　光太樓
(天)牛を追ふ人へ無意味な山櫻　峰月

藤倉屋小集

花婚

花婚は第一親の眼に叶ひ　耕鹽
花婚へタングステンは光りすぎ　風人
花婚のオールバックをまた捨てず　水府
花婚の方へ寫眞師無理をいひ　同
花婚の手から驛辯擴げられ　啞人
花婚の髭はをいてる樣に見へ　同

花輪

岸本水府選

千日の樂屋に古い花輪なり　山月
贈られた花輪樂屋で持て餘し　是々坊
英靈を慰む花輪淋しすぎ　百石
特等にニコ〳〵花輪の贈り主　楠堂
琴の會男の花輪よく目立ち　小人
萬人のねらふ花輪が只一つ　囚蝶
喝采がすめば花輪の影に入り　一聲
企みのひそむ花輪は無名なり　眠聲
天才の藝を花輪で祭り上げ　柳童子
おそろしい人氣花輪の數をよる　暮朗
英靈の花輪へ竝ぶささけ銃　零骨
演壇へ一寸小さな花輪來る　二柳子
汗ばんだ顔が花輪を取り圍み　一州
我れ一人天下の樣に花輪受け　凡平
先輩と言ふが花輪へ近く居る　陽醉
繕つて花輪は二度のつとめなり　彩霞
向ひ風花輪さけ樣かと思ひ　天海
花輪又拍手のうちに殖へるなり　順三
人足は花輪の中へ首を出し　松雨
新店の花輪を飾る中はまけ　同

匿名の花輪に女優考へる　柳路
千秋樂袞れた花輪積み重ね　同
歸朝談花輪々々の間に立ち　蟬翠
裾模樣花輪の横に辭儀をする　同
葬列の花輪の裏を見て疲れ　義矢滿
大花輪賣戸を外して陽氣なり　同
花輪持指のダイヤに陽が當り　青竹
手に花輪受けてカメラの音を聞く　同
花輪から連中樣のお入口　芦穂
自動車で花輪を贈る程な戀　同
獨奏は花輪に醉ふた樣に立ち　同
取り入れる花輪へコツク手を借られ　蝶二
檢校は派手な花輪の横で彈き　同
人足の手淚で花輪持ち替へる　同
童話劇一人花輪に氣をごられ　同
自勤車の上で花輪の手がつかれ　徹底郎
造花屋に悲喜交々の花輪出來　同
棧橋の花輪へ笑ひ〳〵來る　同
本人は無臺の花輪裏から見　同
花輪には改札口の狹ま過ぎる　同

花婚が都々逸を出すひらけかた　路郎
一二三日店を休んで婚をとり　同

小料理屋

小料理屋狹い所が自慢なり　耕鹽
小料理屋の憐りに住んで夜を更かし　飛水
たかひくに銚子の並ぶ小料理屋　水府
小料理屋座敷の中の帽子掛け　同
新築と云ふが自慢の小料理屋　同
三味線と云へば切れてる小料理屋　路郎
小料理屋もう變つてる仲居なり　同
妹を仲居に使ふ小料理屋　同

銚子

冷へてからやつと銚子を氣ずかれる　飛水
これきりでいい一本のあついこと　路郎
臺所へも公然と一銚子　水府
桐火鉢銚子の尻をハスに向け　同

路郎居偶會

船

乘り込んでさきへ猿をおろすなり　路郎
船うたに慰められる出養生　同
あの島にへばりついたか帆かけ船　同

佳

近日開演花輪だけ並べ　芦穂
持つて行つて見るに花輪か小さすぎ　彌生
裏手から花輪が上る車　摩台　蝶二
市長の娘花輪の度に引き出され　桃里
笑顔から笑顔へ花輪浪るなり　輝翠
將軍の武骨に花輪綺麗すぎ　底徹郎
安來節花輪のあるが味をやり　天海

出世

◆　啞人選

心配が變つた丈けの出世なり　助六
出世とも云へず次席の五六年　凡平
出世して歸る故郷の雪景色　柳童子
紹介所出世をする顔で入り　山月
勘忍と云ふを出世はよく守り　百石
出世した話寄附金取りにゆき　白柳子
天才の世に出るでは馬鹿にされ　是々坊
二年目の肩に出世の星三つ　小人
出世もせずど〳〵とかゝる也　二柳子
出世した子は洋服を着て戻り　眠聲

花輪持ち撮して欲しいやふに待ち　義矢滿
日傭ひの花輪の端を貰つて來　同
人
紋付の幹事花輪の向を替へ　彌生
地
合宿所花輪の處置を考へる　陽醉
天
嬉しさの餘り花輪へ首を入れ　輝翠

共選

吉川啞人
竹田蘆穂

出世して不足と思ふ許嫁　蝶二
大關に成て故郷へ巡業し　暮朗
出世する樣に藝者の親は云ひ　囚蝶
出世を尋常にする聲となり　一洲
小頭と云われる迄に出世して　久樂
園い者親爺出世の内に入れ　青竹
出世して急に周圍を淋しがり　彩霞
出世を待つばつかりに年が老け　輝翠
出世して昔の友を遠ざける　一聲
俺の村から大臣の出た騒ぎ　楠堂
早過ぎる出世に畝が一人殖え　松雨

手で波を切るほど船のうらかき　同
すき燒と見ゐて船頭葱をさげ　同
行く先を船員の子は知つて居る　同
船べりへ腰を掛けてるいゝ月夜　同
船一ッ木の葉のやうに流れてる　同
釣船が此處にも一雙點てゐる　徹底郎
棧橋の涙を舟は知らぬなり　同
あの舟の右が淡路と指を差し　同
大船に乘る氣になれぬ居候　同
小蒸氣が通つたらしい岸がねれ　同
見て居るとあすこにも居る沖の舟　同
釣船が過ぎると芦は起き上り　輝翠
蠣舟へ飛沫のは入る風が吹き　同
傾いた船に他人の肩を借り　同
近づいた舟にはつきり文字が浮き　輝翠
次ぎ〳〵に來る渡舟の腹へ消へ　同
起重機の音泥舟へ高すぎる　同
船世帶隣の船を踏んで行き　啞人
渡し船今來た人へ向きを替へ　同
干てある船をカメラへ入れて來る　同
舟の醉それから深い仲となり　芦村
フィルムは浮雲いとこの舟で逃げ　同
保津川を飛行機ほどに浮雲かり　同

出世して見ても浮世は浮世なり　零骨
出世の甲板次第に氣がいらち　一洲
舊道をとつて出世戻つて來　義矢滿
人
二タ親があればと思ふ金が出來　光太樓
地
成功の早道といふ本を買ひ　徹底郎
天
慰の鍬に昔の覺えあり　雅幽

◆　芦穂選

書生部屋あの大臣も居た話　白柳子
天才の出世するまで馬鹿にされ　是々坊
出世して戻れと女のまずい事　小人
あの女見捨て出世の旅に立ち　眠聲
出世した話小僧はきき倦きる　松兩
出世する心に行李締りすぎ　蝶二
立志傳には似てゐるが二階借　楠堂
俺れの村から大臣が出た騒ぎ　同
牛の尻洗つた事もある旦那　助六
心配が變つただけの出世なり　同
出世して見ても浮世は浮世なり　零骨
出世してから捨てられた顔に逢ひ　順三
出世ともいへず次席の五六年　凡平
出世をせよと學資へ書き添へる　輝翠
出世するたんびに名刺の損になり　同
出出してから退屈な椅子へ掛け　同
奥さまは舞妓時代を口にせず　同
兩親があればと思ふ金が出來　光太樓
星三つ意氣揚々と戻つ來　同
出世する覺悟は變ゐぬ無心狀　義矢滿
出世する氣もなく使丁今日も來る　徹底郎
出世した今日を見せたい戀敵　同

未來主義者

甲『何だ君は、正月から勞れたやうな顏をして居るぢやないか。』

乙『然うよ、三百枚といふ名刺を一々投込むのは噓分骨の折れる仕事だよ。』

甲『朝からやつて居るのか。』

乙『いや是からやるのだ。』

大根

大根と思ふぬ料現人の手際　撥底郎
大根屋折って御らんと腰を見せ　同
大根屋ケッタイな沓履いて居る　同
大根を切つてゐらしい勝手元　同
干からびた大根へ寒い風が吹き　同
大根を大根に切る下女の腕　同
手内職大根おろしですますなり　葭乃
大根を切つて買ふ程世帶なれ　同
大根屋の荷へ裏長屋總出なり　同
巢があつた小言を受ける大根賣　同
大根では終らぬ氣なり旅役者　同
麥まきの迫つて大根引抜かれ　輝翠
大根を吊した枝に柿一ッ　同
今洗ひ上げた大根の手の赤さ　同
突き大根殘っただけを丸で煮き　同
嬶曳の影と大根を干した影　路郎
大根の畑へ鞠を見失ひ　同
大根のやうだと笑ふ脛を持ち　同
大根葉小鳥を飼ふて貰ふて呉る　耕鹽
ゑなこんな大根と一本折つて見せ　同
大根に目鼻をつける隱し藝　啞人

傘のいろ〳〵

＝＝昔の句と今の句＝＝

から傘を半分貸して廻り道　古句
當座逃れは傘を横にさし　同
傘を上へすぼめる大嵐　同
傘も二人でさせば戀になり　同
かうさしてゆきやれと破れ傘を貸し　同
面白く傘を取られるつむじ風　同
からかさを雫で返す律義者　同
相傘をいたちごつこの樣に持ち　同
女ねぢれる橋のからかさ　同
吹き降りに首を呑んで蛇の目傘　同
相傘の咄も切れる水溜り　同
傘借りに沙汰の限りの人が來る　同
人柄へ傘を一本貸しなくし　同
腹立つて出る傘は開きすぎ　同

○

この傘へ入れてやりたい停留所　綠天
敎はつたとほりに急ぐ宿の傘　同
ごれなりとさして歸れと長火鉢　同
初戀のこう〳〵傘がきせられず　同
さしてみて廻してみたい新の傘　佳汀
辭退した傘が戀しい軒傳ひ　同
おきせ申す傘が生憎ひろがらず　同
追ひかけて來てきせかける芝居茶屋　蚊象
先斗町一人二人の傘をよけ　同
ちと寒い樣子で疊む宿の傘　水府
傘が倒れて早や終點へ着きにけり　同
傘の雫も一つや二つい丶女　同
せく傘は風に向つて行く如し　五葉
用あつて出る番傘へ力過ぎ　同
お父ッさん傘が重たい年になり　同
島原を見るだけといふ宿の傘　飴ン坊
お返へしに及びませんとこんだ傘　同
お隣の子のと學校へ二本提げ　同
お妾があたしの傘を貸してあげ　路郎
母親に押しつけられた傘を持ち　同
新世帶ただ一本の傘を貸し　同
降りつゞく雨に印も入れずさし　同

○

古句は果して幾人で作つた句か知らないが、斯うした今人の句と並べて見ると面白いではないか。同じく破れ傘を咏んだ句でも、古句の『かうさしてゆきやれと破れ傘を貸し』に對して飴ン坊氏は『お返へしに及びませんとこんだ傘』と破れ傘と云はずに破れ傘をきかしてゐられる。こゝにならべた古句の十四句が何れも佳句である譯ではないから、讀者自身で比較研究されたいものである。私の敬服してゐる句は『當座逃れ』『かうさして』『からかさを雫で返へす』『女ねぢれる』『相傘の咄も』『傘借りに』『人柄へ』『腹立つて』の八句である。今人の句は佳句だと信じたもののみを載せたのです。今人の句で綠天氏の『敎はつたとほりに急ぐ宿の傘』水府氏の『ちと寒い樣子で疊む宿の傘』飴ン坊氏の『島原を見るだけといふ宿の傘』を比較して見るのも面白いではありませんか。（路郎生）

編輯室から

本誌の主義とするところは、なるべく通俗的で、世間に川柳を宣傳すること、勢ひ初心者の指導といふことに力を注ぐにあります。それがために 幾分の玉石同架はまぬがれぬこと、覺悟いたして居ります。◆本誌發行がいよ〳〵實現されることになつたのは 年末のことであつたため、色々な準備の點まで思ふやうに捗らず、各方面からの寄稿を仰ぐひまもなくて、創刊號は兎に角私の拙い原稿で殆んど埋めてしまひました。期待にそむく點は幾重にもおゆるしが願ひたい。◆本誌の成立については先に 御挨拶狀も差上げてありますので、御承知の方も多からう存じますが住所不明のために 通知狀が舞ひ戻つた方もありますので 重ねて極く簡單に申上げておきます。◆從來大阪から柳誌「みをつくし」を發行されてゐた川柳以交 吟社の同人の方々が日に月に「みをつくし」が隆盛になり、多數の會員を有する結社になつたので、單に會員相互間の機關誌であるといふだけでは 滿足が出來なくなり、「みをつくし」創刊當時から同誌の顧問といふ關係にあつた私 のところへ主幹になつて雜誌を 大きくして呉れぬかといふ交渉がありました。◆けれども私としても全く突然のことではあり お斷りを仕樣かと思つたが、餘りに以交吟社の同人の方々が白熱的なのに動かされて 遂に起つことになつたのです ◆元々斯うした仕事は物質的に惠まれてゐないではさう、樂々とやつて行けないことを百も承知なので、氣永にやつて行かうと思つて居ります ◆それがため以交吟社の人々に前述の方針の下にならば、引受けやうそして單に以交吟社にとゞまらず、この際出來るだけ多くの吟社を併合して、雜誌を堅實なものにしやうではない かと謀つて贊成を得た次第であります。◆それがため神戸の柳影草社の高橋古城山氏、筒袖の中川露太樓、平井光太樓、山岡剛山の諸氏、山口縣の柳川洲馬氏、千兩箱川柳社の原史風氏その他の諸氏が續々と入社され、私逸のこの仕事を救けてくださることになつたのです◆東京の井上創化坊氏金澤の安川久流美氏、小林紅漣師氏、廣島の八翠坊氏その他の諸氏から本誌の創刊に際して 深甚の好意を寄せられたこと、二木幸堂氏から雜誌費中へ金一封を送られたこと、各地川柳家から小生宛に年賀狀を賜つたことなど取纒めてこゝで 御禮申上げます◆本 號はもつと早く出る筈であつたが最初に廻はした印刷屋が勞働爭議のため、原稿が其處で暫く滯在したためです。大變にお待たせしたことをこゝにおわびしておきます。三月はすぐにとりかゝります◆本號は私が編輯しましたが次號からは新進氣鋭の竹田蘆穗氏が編輯を擔當することになつて居ります（一月二十一日）

川柳塔

○　吉川啞人

ぶつつかるやうに廊下の大鏡
團体が鶯張りで鳴らすこゝ
一番の鷄に雜魚寢の一人ぬけ
がつかりとして夕暮の灯へ戻り
女房の支度にハガキ二枚書き
小間物屋會席膳の樣に出し
整理する氣にもなれない机也
荷造りの仕舞は膝を輕く打ち
珍客に電燈の玉替るゝなり
あの時のお子さんですかと旅戻り

○　竹田蘆穂

宿引の平手は掬ひ入れるやう
花婿に早や剃刀が切れ止んで

樂屋落

▼快漢徹底郎は何事でも底徹的にやらねば氣の濟まぬ男だけあつて、酒を呑み出すと家は愚か最愛の妻も子も彼の眼中にはない。つい鼻の先の灘も伊丹も呑んでしまひさうな元氣だが、翌日になつて一度彼の眼に細クンの顔が映ると低頭平身、これ又徹底的に家庭の人となる。而して二人の女の子を兩手にブラ下げて編輯所を覗きに來る同人きつての人氣男▼落ちついてゐるやうで慌て者の吉川クンは此の頃家族連れで齒醫者へ通つてゐるがつい此の間のこと醫者まで行つたのはいゝが藝口を落したのに氣がついた。落したのは細クンだつたので叱られずに濟んだ。ところが家の鍵まで落したので這入れないで弱つてゐたそうな▼櫻ケ丘で文化生活とやらをしてゐる史風クン川柳家は尻の穴が小さいと、あの痩せこけた顔で見て來たやうなことを言つてゐるか

ポッペンはこわれる音を繰り返へし
船が出た後で見送り寒うなり
もうこれで片付く音のポッチキス
寒行が戻るまで嫁湯を沸かし
喇叭卒倒れて止むの顔で吹き
温泉の宿はごの手摺にも物を干し

森田輝翠

○

立ち話途切れ〳〵に子を叱り
此の村の舊家を松の枝に見せ
Sカーブ大蛇の様な列で行き
牛乳屋焚火の方へちと戻り
鉋屑焚いて廂を危ぶながり
廊下までキャッチは毬を拾ひに來

西垣松雨

○

ちとぬけた男が獨樂をよくまわし
殿様の髷は慈姑のやうにはね

橋本二柳子

○

藤棚へ春がきてから暗くなり
貰ひ水一足毎に減つて來る
夕燒に寫して見たい磯もごり

と思ふ、と何時の間にか旅鳥になつてゐる▼紫郎クンはまだ同人にはなつてゐないが、十九日の本社の創立句會の當夜、吉川クンから出席を促がされてヨシ來たとばかりに、早退きまでして紋付袴で築港の人事舘へ騙けつけ端然と坐つて待つてゐたが誰一人來ないので、いささか寒くなり、會場間違ひと知つて茫然としてゐたさうだ、その慌て方と來たら吉川クンの友達だけあると陰での話▼同人の夜調、正月にコツソリと城崎に出掛け、愛人といふものは、いいものですねと頼りだけはあつたが、創立句會に顔も出さねば、まだお土産も持つて來ない▼正月に別府に遊んだ洲馬クン、浮世小路あたりで嬉れしいあの妓にでも逢つたのだらうあちらこちらへ、頻りに飛ばした一錢五厘錄▼お茶ば裏ですと落ちつき拂つてゐる露太樓クン、創立句會に顔を見せないのでどうしたんだらう、多分忙しいのだらうと同情をしてゐると、默つて中座行きをしてゐたのが句を送つて來て露見し

一錢を握つて飴屋追つかける

○　平井光太樓

よつぽど儲からねばドラックの灯
言葉尻妾聞かねば承知せず
借金と別な衣裝が縫ひ上り
お家はんの通りに御寮人もなり

○　太田徹底郎

焚火して話す一人は脊を向け
炭俵持つて焚火の輪を擴け
用心をして赤インキ手を汚し
遺言を聞きに極道歸へつて來
シデ紐を何時のか女房出して來る

○　岩崎柳路

タイピスト新米らしい音を立て

○　酒井零骨

小包の結びは母がしたらしい
メートルを敎へ番頭一つ賣り
旅立ちの悴へ浪が高すぎる
折箱屋木槌に輕い音をたて

た。露知らぬとは云はせぬと洒落れて見てもおつつかぬ▼本社の宣傳部にあつてさるものありと知られてゐた柳路クン一寸顏を見せないと思つてゐるとヒョッコリ東京から密越した、ハガキに曰ク、東京の某々の住所至急に知らせ宣傳に行くだとさ、二度目の地震の視察も次手に頼んまッセ▼輝翠クン商ひを細クンに押しつけておいて川柳に熱狂するのも、エ、が泄の坊の弟子はどうする氣だ、と心配してゐる人があるぜ。さういふ男も川柳にかけては目も鼻もない男だが▼耕塩クンは落語家みたいに仕事のかけもちで有卦に入つてゐる。創立句會の夜は本職の方で働いてゐたが、會の歸りに出逢ふとどうも殘念でしたと例の鍋のある聲でこときわけを云つた▼芝居がすきで、舞ひの手で歩くかほるクンはお芝居の背景を描くことを習ひに行つてゐんださうな、どこまでも變つてゐ▼光太樓クンは神戸に會がある時には會社の方を朝から休んで出掛ける。萬一差支でもあらうものなら

居候今日も廓を見て皈へり

○　太田一聲

止むを得ず隣りへ錨借りにゆき

來客の來る毎小供顔拭かれ

てんまりに廊下で輕い音をたて

三ヶ日纒めてつけた日記帳

人だかり魚釣る人は泣きたそう

○　黑田佳扇

雜煮箸持つて餅搗賴みに來

已れから隱居を決めて寢て暮らし

○　宮内一洲

價の出來た筈だが跡の捕手沙汰

い、年でさらばと言へば連れになり

○　小泉飛水

美しい娘は嫁にまだ早し

急用に錦帶橋の邪魔なこと

歸鄕して母も盃くれと言ひ

萬難を排してでも川柳會だけは行かねばと、築港を出かけて見たり戻つて見たりして結局電車賃の損▼零骨クンは五時の創立句會に三時から會場へ來て、待ち草臥び、コクリ〳〵こやつてゐる熱心さ。南海を川柳化するために目下狂奔中である▼同じ南海黨の一聲クン子供が亡くなつて間のないのにもかかはらず、これ又創立句會に早々から詰めかけて忠勤ぶりを見せてゐた▼佳扇クンは新舊思想の衝突こやらで塒を取り替へてしまつた、一寸遇激派也。原因は徹底郎クンに聞けば判る『片棒をかつぐゆうべの河豚仲間』の口だから▼飛水クンは今度鄕里から美しい細クンをいけごつて來たから當分は何もいふことはあるまい、芽出度々々▼一洲クンは時々偉大な體格美を編輯室へ運んで來る。そして話すだけ話すとサツサと歸つてゆく▼風人クンは琵琶に有頂天だと誰やらがいふ、イヤ琵琶ではない琵琶の先生に有頂天だと誰やらが訂正した。果してどちらが本當だか夫れは賢明

○　武田彩霞

二階から世帶が變るビルディング
ホームラン小春の空によく響き
春雨がつい戀仲にしてしまひ
當てにした身許保証を斷られ
兎も角も來往欄へ乘つて居る
中山手グリンランタンと云ふ魔窟

○　松本助六

居候コーヒさました譯でなし
學友と逢ふて巡査の眞面目すぎ

○　宗清夜調

だんまりで只見る雪の屋根續き
一人來て鏡臺だけがいやな部屋

○　關本稚幽

大望を抱いてたよる二階借り
女房の知らぬ工面を君と僕
御無沙汰は筆のまわるがまゝに詫び
大晦日おほよそ餅の數を聞き

○　石井風人

なる讀者諸クンの判斷に任かす。ただし先生は一寸美人ですと岡燒連の話、これは事件の内容を判定するための參考までに申添ねておく▼路郎センセイ、大大阪の川柳會へ出掛け歸途一杯機嫌で時計を見れば、正に午前一時廿三分、コリ大變とばかりに韋駄天走り、阪神電車の梅田停留所に轉け込んだのが終電車の發車時刻、一時半を過ぐること正に五分、さても駄目だと觀念のまなこを押しひらけば夢ではないぞ、ホントの電車だ。そこへ大便所からノソ〳〵と出て來たのが、これ又ホントの車掌クンだつたさうな▼古城山クンは近頃本職の方が閑だと云つて毎日のやうに兵庫縣と大阪府の間を川柳のために往つたり來たりしてゐるが、コレでは京阪電車と大阪市電と阪神電車のために暮らしてゐるやうなものだ▼松雨クン時々懷中から異樣に光るものを出す一體ソレは何んですと聞けば白金懷爐ですといふ。流石に紳士的だネと云へばイヤ之れを賣るのが私の商賣ですと一ト通

棧橋へ疲れたやうに船が着き

○　盛井耕鹽

こけましたと産婆呼びにやり

○　中川露太樓

薄情な親類もゐる枕元
目の前の蠅の自由にあこがれて
ひまな人と流石思はす節廻はし
階級とやら一本の煙草にも

○　高橋古城山

今日結ふて來たなと亭主思へ共
裏悌子逃げるに派手な音を立て
其れとなく入智恵をして叔父は去に
もう明ける街へ豆腐屋湯氣を立て
フト嫁のよ過ぎる噂聞いて來る
勘定機家一ばいに響くなり
大丈夫ですかと棚へ念を押し
嫁の里貧しいことが落度にて
痩せたんと違ふかと聞く里歸り
本當に泣いたと藝者思はれず

り珍品の御説明▼雅幽クンや助六クンの珍談は不幸にして未だ聞かない。向ふから云はせれば、幸ひにして、まだ聞いませぬかといふだらう、イヤ恐縮々々▼二柳子クンは默つてるし、蘆穗クンは眞面目だし流石の樂屋子も手のつけやうがないのでコヽラで筆を投げやう。

消息

◈岩崎柳路氏は東京市芝區愛宕町一ノ一六大成社移られました

◈小泉飛水氏は一月一日鄕里山口に於て結婚式を擧げられました

◈太田一聲氏の二女信子さんが一月十三日永眠されましたからお知らせします

◈小田浩仙氏は八日市飛行隊に入營されました

◈横濱の川柳家が集まつて濱の會といふのをはじめた。近く機關紙が生れるだらう。

◈本社創立句會は一月十九日大阪の書林倶樂部で開催された。句稿は次號で發表。

祝川柳雜誌發刊

岡島王魔遍
大阪市北區地下町
宮崎一二堂方

和歌山市南汀町七番地
秋月明
—久樂—

左和右平
大阪市北區東野田町
七丁目一三四ノ二

擬寶珠

毎月一回(十五日)發行
壹部拾五錢　六部八拾錢
十二部壹圓五十錢(送共)

京都唯一の小柳誌として大なる抱負と自信
とを持つて編輯せられてゐる若い人達の眞
摯なる態度を御覽下さい。

瀟洒たる型、刷、
氣持のよい紙質
ゆるやかな句調

京都市三條寺町東入
鼎川柳社
電話中二二七番
振替阪四四三三七番
(藤井貞宛)

新春既刊
見本(切手十五錢)

祝發刊

大大阪川柳社

本田溪花坊

大阪市北區老松町三
電話北二四五八番

祝創刊

川柳に眞面目な眞劍な熱心な

原史風

大阪市北區南同心町二丁目

電話北三七五一番

古本

高價に申し受けます

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話 南五六二番

公立社の主人公は私と古い馴染で世間並の商賣人ではありませんから安心して賣買が出來ます道頓堀へ散歩の次手に是非立寄ってあげて下さい（路郎生）

投稿規定

▼句稿は別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書『川柳雜誌原稿』と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の罫紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

四月號課題

二月二十八日締切

（各題二十句以内）

▲大工　齋藤松窓選

▲島　安川久流美選

▲流連　高橋古城山　中川露太樓　共選

五月號課題

三月廿五日締切

（各題二十句以内）

▲眼病　佐藤きん坊選

▲叔父　楫元紋太選

▲襖　吉川啞人　竹田蘆穗　共選

毎募集

▲近作柳樽（句數無制限）麻生路郎選

▲各地柳壇（會報）編輯局選

▲文章（評論研究吟行漫文）

定價

一部　參拾錢（郵税）

六部　壹圓六拾錢

十二部　參圓（共）

廣告料

特等一頁　參拾圓

普通一頁　貳拾圓

同半頁　壹拾圓

五號一行　貳圓

▼御送金は振替口座大阪三一五一四番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直ちに御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てます其の場合には御不在中でも頂けるやうに願ひます但集金郵便には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は箇人宛にしない事

大正十三年二月十二日印刷
大正十三年二月十五日發行

（毎月一回十五日發行）

編輯兼發行印刷人　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　麻生幸一郎

印刷所　大阪市東區農人町二丁目七番地　藤本兄弟社

發行所　兵庫縣武庫郡鳴尾村字寺ノ後四四番地　川柳雜誌社

振替口座大阪三一五一四番

川柳雜誌社同人（いろは順）

主幹　麻生路郎

岩崎柳路　石井風人
原史風　橋本二柳子
西垣松雨　吉川啞人
太田一聲　太田徹底郎
高橋かほる　高橋古城山
竹田蘆穂　中川露太樓
宗清夜調　黑田佳扇
柳川洲馬　山岡剛山
松本助六　小泉飛水
酒井零骨　宮内一洲
平井光太樓　森田輝翠
盛井耕鹽　關本雅幽

支部所在地

第一支部　大阪市西區八條通南小路　幹事　橋本二柳子
第二支部　大阪市外天下茶屋南下ノ森三五〇　幹事　森田輝翠
第三支部　大阪市外濱寺町下五六〇　幹事　酒井零骨
第四支部　大阪市西區鶴町四丁目第十三號區　幹事　關本雅幽
第五支部　大阪市北區西野田中江町二三三　幹事　小泉飛水
第六支部　大阪市北區澤上江町二九八　幹事　石井風人
第七支部　大阪市外南濱一八二　幹事　西垣松雨
第八支部　神戸市旭通二丁目八三　幹事　宮内一洲
第九支部　山口縣山口町石原小路　幹事　柳川洲馬
第十支部　神戸市兵庫水木通一丁目二九　幹事　中川露太樓

本社幹事　蘆穂（編輯）啞人、古城山（宣傳）二柳子（會計）

麻生路郎氏編　三版

大正傑作一萬句（俳句）

四六横版四百八十一頁
壹圓廿錢
送費八錢

本句集に集めたるものは、「オトトギス」「同人」「倦鳥」「カラタチ」「雞」「コブシ」「縣葵」「にひはり」「ほばしら」「俳諧雜誌」「俳諧文學」「ふるさと」「海月」「東風」「澁柿」「澤の光」「初蟬」「曲水」「雲母」「南柯」「中心」「かけろう」「枯野」「鹿火屋」「誕生」、その他十數の雜誌、「大阪毎日俳壇」「大阪朝日俳壇」「關西日報壇」「大阪日日俳壇」その他の新聞、及び各團體並に個人句集よりも採つた、數十萬餘句中から傑作一萬句を選拔したもので本集の價値に就ては發行後日からずして定評を得既に三版をかさねてゐるに見ても明らかである。

新選傑作一萬句（俳句）

目下編纂中

全國書店にあり

發行所　大阪市西區靱南通り二丁目　藤谷崇文館
電話土佐堀三六一九番

取次　兵庫縣武庫郡鳴尾　川柳雜誌社
振替大阪三一五一四番